國學院大學学術情報リポジトリ

多和田葉子「献灯使」に描かれた〈老い〉: 身体と認識との差異

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 安西, 晋二, Anzai, Shinji
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0000492

多和田葉子「献灯使」に描かれた〈老い〉

―身体と認識との差異―

安西晋二

一、文学のなかの〈老い〉

めとした、高齢者を含む大幅な人口減少は確実に近づいている。は一億を下回るとの人口推計を出した。団塊世代の喪失をはじなれ、世界有数の長寿国にふさわしい情報が巷間には溢れている。一方で、総務省統計局は、二○五○年までに日本の総人口る。一方で、総務省統計局は、二○五○年までに日本の総人口は一億を下回るとの人口推計を出した。団塊世代の喪失をはじた、高齢者を含む大幅な人口減少は確実に近づいている現在の日本において、高齢者を含む大幅な人口減少は確実に近づいている現在の日本において、高齢者を含む大幅な人口減少は確実に近づいている。

多和田葉子の「献灯使」(「群像」平成二六・八)は、このよわれているのである。 根野に入れた少子高齢化という現状と、いかに向き合うかが問高齢者を対象としたビジネスも楽観視はできない。人口減少を

環境の「汚染」により、諸外国との国交が途切れた日本は「鎖すらも身体的に困難な曾孫の無名を、彼は養い、家事に勤しむ。かれている。小学二年生ではあるが、食事や歩行、服の着替えかれている。小学二年生ではあるが、食事や歩行、服の着替えがれている。小学二年生ではあるが、食事や歩行、服の着替えがれている。小学二年生ではあるが、食事や歩行、服の着替えがれている。小学二年ではあるが、食事や歩行、服の着替えがより、「洗きり、「洗きり、「洗きり、」は、このような日本の「洗染」により、諸外国との国交が途切れた日本は「鎖球境の「汚染」により、諸外国との国交が途切れた日本は「鎖球境の「汚染」により、諸外国との国交が途切れた日本は「鎖球境の「汚染」により、諸外国との国交が途切れた日本は「鎖球境の「汚染」により、諸外国との国交が途切れた日本は「鎖球境の「汚染」により、諸外国との国交が途切れた日本は「鎖球境の「洗り」といるが途切れた日本は「鎖球境の「汚染」により、「対域の「洗り」といる。

(2019年) であった。多和田は、 ただし、多和田葉子自身は、近未来的なイメージには否定的 ロバート キャンベルとの対談で、義郎

第120巻第7号 えば、本当にそうなのかは誰にもまだ最終的にはわからないと と死ななくなる、という設定になっています。もっと正確に言

いう設定ですけれど」と「放射能」の影響を示唆し、「元気な

や無名らの身体的な特徴について、「年寄りは放射能に当たる

造はすでにあるわけで、そういう意味でも『献灯使』は未来小 年寄りが日本社会を支えていかざるを得ない。そういう社会構 説じゃないんです」と述べている。「元気な年寄りが日本社会

学」と呼ぶべきであろう。

十分に機能していよう。 て、「献灯使」は、高齢化社会の変奏を描いた文学作品として を支えていかざるを得ない」という「社会構造」は、 た日本社会の現状に通じていよう。義郎をはじめとした高齢者 〝社会〟を支える中心的な構成員・労働力にほかならない。よっ 無名らのような若い世代を、あるいは物語内における 先に挙げ

これまで、高齢者を題材とした文学作品では、

〈老い〉によっ

國學院雜誌

はないだろうか。たとえば、鈴木斌は、そのような日本文学に てもたらされる境地が、検討の対象となることが多かったので

おける〈老い〉について、次のように説いている。 平均寿命が延びた今日、 定年を迎えても精神や

だ若い。しかし、その日を境にそれまでの社会的地位は

いる。この二様の文学の呼称は定着していないが「老人文 れば見えてこない人生の真実を描いた作品が確実に増えて れた自由な立場と時間を生かした生活や、老年にならなけ 苦悩し、それらを嘆いた作品が多い 従来までの日本文学に描かれた〈老い〉 挙に消滅し、 しかし、最近はその流れと共に、老年によってもたらさ 同時に経済的な基盤も大幅に弱体化される。 はこの激変や病に

う生の願望よりも、周りに迷惑をかけるようならすみやかに死 る日本の長寿社会の現実ではないか」と天野正子がいうような、 にたいという死への親和性。それが世界有数の「豊かさ」を誇 テーマであろう。また、そこには、「すこやかに生きたいとい 鈴木の説く「老人文学」の特徴は、 確かに〈老い〉ならでは

も禁じ、

「汚染」は、

食生活を変化させ、無名と義郎との身体

いわば、〈老い〉るにしたがい

義

る。

的な差異を鮮明にしていく。

から始めたい。

て整理

現実的な社会状況とのつながりを検討するところ

す契機にもなろう。

ようと、 死の観念も関わるはずだ。 身体の衰えと死とは、 医療技術が進歩し、 〈老い〉と不可分であ 平均寿命 が .延び

本の「鎖国」 本的に死から遠ざかったところに存在している。 だが、 「献灯使」の義郎は、 は、 国内での外 国語 「死を奪われた状態」にあり、 (カタカナ語) の使用までを なおかつ、 日 根

郎が培ってきた価値観は、 しく揺さぶられているようですらある。 環境の変化と無名とを前にして、 激

学術的な見地を得るための情報のひとつとしてしばしば利用さ トロジーの評価が、 近年では、 老化現象を多面的かつ総合的に研究するジェ 日本でも進んでいる。 そのなかで文学は、 ロン

違が、

世

界

は

それは、 高齢化社会と連接するという「献灯使」を、あらためて問い直 ような れる。老化を多角的に分析するうえでも、 〈老い〉 多和田葉子自身が への注目は、 そこでまずは、 「未来小説じゃない」とし、 有効な観点になるはずだ。 「献灯使」 義郎から読み取れる の物語世界につ 翻って 現 在の

献灯 使 の物語世

考が挿入されていく。特に、 もまったく語られない「献灯使」では、それ以前と以後との おいて彼らをめぐる環境・状況が、 授業中までの時間を大枠としつつ、そこに登場人物 献灯使」 「放射能」という言葉は一切使用されず、「汚染」 義郎らを介して前景化されていくのである。 は、 末部を除いて、 義郎の回想では、 朝 過去と対比的に表されて から無名の通う小学校での 物語 の現在時に 0 の原因等 口 想や思

解釈した結果」、 記したり、「インターネットがなくなった日を祝う「御婦裸淫 なくなった世代が「made in Japan」の「made」を自分なりに 確な経年は断定できないものの、「献灯使」では、「英語を習わ 日本の「鎖国」化から、 汚染」以前と以後とを内包する「献灯使」の物語 自社製品の靴の中に「「岩手まで」と毛筆で」 数十年が経っていると想定される。 明

これらのようなユーモアの溢れた言語感覚は、 う小説の魅力であると同時に、 の日」」ができたりと、言葉をめぐる状況にも大きな変化がある。 「汚染」後の時間経過が 献灯使」とい 世代

の教育・

認識の格差をともなうレベルにまで達していること

を意味してもいよう。

— 24 — な過去の出来事なのではなく、

「汚染」は、すでに過ぎ去った、

時

的

含む(あるいは起点とする)さまざまな「災害」「汚染」が、

無名とに進行中の事態である。 過去とたびたび対照させるのであろう。 おける環境・認識の変化を、 自らが生きてきた「汚染」 物語内の現在時を生きる義郎と だから、 義郎は、 物語内現在に 以 前 0

第120巻第7号(2019年) 射性物質汚染に対応する人間を含む環境変化を物語っている_ 「「不死の島」の延長で」あるとし、「厳しい放射性物質汚染と 曾秋桂は、このような「献灯使」の物語世界を、「厳しい 放

に、

生態系にも大きな影響を与えている。その結果、義郎は、

象徴的な形で語られていると言えよう」と指摘した。「不死の島 (『それでも三月は、また』講談社、平成二四・二)は、 いう現実の中で、それに適応するしかない人間社会の変容が、 「献灯使

事故との影響が、かなり直接的に表された作品である。両作は、 か 同様の設定が採られ、どちらも確かに「現実」に「適応するし の二年前に発表され、東日本大震災と福島第一原子力発電所の ない人間社会の変容」が描かれてもいるため、「献灯使」を「「不

國學院雜誌

死の島」

葉が周到に避けられている。 灯使」では、 原子力発電所の事故とに限定されるのではなく、 震災や原発事故 したがって、東日本大震災と福島 (放射能汚染) を直接的に示す言 これらを

両作のつがなりを示唆する発言は見られる。ただし、「献 の延長」と読むことはできるだろう。多和田葉子自身

> 生動物を目にすることはなくなっていた」と語られているよう を断絶させるだけではなく、「この国ではもうかなり前から野 灯使」の射程には収められてこよう。 なかでも「汚染」は、日本を「鎖国」と化し、 海外との 国 交

れるものは限られており、特に魚介や野菜などには「汚染」の 食物に対して細心の注意を払うことになる。無名に食べさせら

ながら食事を楽しもうとする。 を振り払って、義郎と鞠華は楽しい思い出を網ですくいあげ_ 鍋からあがる度に、マイタケがあがる度に、不吉な汚染の記憶 を訪れた際に食べられる鍋では、「いつもなら食べないエビが 記憶がつきまとう。別居中の義郎の妻である鞠華が二人のもと 販売されているものを買って来

く表れている。 彼らに深く根差し、その行動に負荷をもたらしているのである. 染」は、 また、「汚染」の影響は、 物理的な現象としてあるのみならず、「記憶」として 義郎と無名とは、 食生活とともに居住環境にも色濃 質素な仮設住宅で 一避難生活

二人の「不吉な汚染の記憶」は決して拭い去れてはいない。「汚 ているのだから、「汚染」はほとんどありえないかもしれないが、

を送っている」とされている。

二人を見た鞠華は、

義郎もこ

が住んでいない。

国会議事堂や最高裁が引越ししたという

人口が増えていくことが予想されている。

都心にはもう人

くい沖縄へと移住者が集中しているのである。 がっているがゆえに、農作物が豊かで「汚染」 なものであるのがうかがえる。それが関東から関西にかけて広 女が移住した」。環境の変化は、季節にまで及ぶ極めて大規模 雨に追い立てられるようにして、本州から沖縄へたくさんの男

の影響を受けに

きた」と実感しているが、 の家がかなり気に入っていることが話しているうちにわか より深刻な状況を物語っていよう。 むしろ、仮設住宅の建設と都内の様 つて

たせいで農業がやりにくく」なり、

人々は、「干ばつや暴風

11

るとされている。「本州は季候が乱暴で気まぐれな性格になっ

地域で、これから中山道沿いに京都まで帯状にじわじわと 仮設住宅 の 増加 が目立 つのは多摩地区から長野にかけての

とは確かだった。空洞である。 話は耳にしないが、かつての建物がもう使われていないこ

内では、すでに「北海道は移民を受け入れない政策をとってい たい人は夫婦で申請しなければ採用されないことになった」。 たが、男性労働者だけが増えるのを恐れ」、「沖縄の農場で働き る」。対して沖縄は、当初は「移民を無制限に受け入れる方針だっ だが、この移住も無制限に行われているわけではない。

困るので、 戚等に預けてくるならば移住許可が下り」、「子供が生まれると したいという夫婦は採用されないが、 預かり所が不足しているので、十二歳以下の子供を連れて移住 ていなければ移住許可はもらえ」ず、 「農園以外の仕事はほとんどないので、農場への就職が決まっ 女性の場合は五十五歳以上、 子供がいてもその子を親 しかも、「保育園や児童 男性 0 場合はすでに去

までもが行われているのである。

勢手術を受けている人が優先され」るというように、人口管理

る地区」に指定され」ている。「もう何年も足を踏み入れたこ 二十三区全体が、「長く住んでいると複合的な危険にさらされ 一献灯使」では、「汚染」の影響によって、「一等地も含め東京

界が描出されているともいえよう。 地方と移住者が増加し続ける東京という現実とは、 する場面もあるように、居住者のいなくなった都心には、 とのない新宿の町は今どうなっているのだろう」と義郎が想像 「空洞」化が起きているのである。ここには、過疎化が進む 一変した世

人口

しかも、 人口の推移に関しては、 沖縄への移住者が増加して

— 26 — い社会問題となっている。 いても人口減少は、 初に述べたように、 あいかわらず、改善を要するが避けら 子どもの出生による人口増加は、 献灯使」 発表以 後 の現 在 0

 \mathbf{H}

本に

代日·

本の状況と相似形をなしてもいるのである。

ħ

な お

産が認められていない。

無名世

|代の状況と、この子どもが生

合計特殊出生率がもっとも高い

い沖縄は、

物語内では移住者

現

実的に

は 0 8 出

第120巻第7号(2019年) のデー むべき未来だ。たとえば、 殊出生率がもっとも高いのは、 夕8 (平成二八年度調査) 総務省統計局による平成三〇年公開 によれば、 沖縄の一・九五である。 現在の日本で合計特 一方、 望

実の東京の人口は、 東京の合計特殊出生率は、 移住者によってまかなわれている部分が大 一・二四と国内でもっとも低い。 現

の転 国内一二位であり、 化が進み、 きいわけだが、 入率 (五年前の常在地が他県の者の割合) 多くの人々が沖縄に移動していく。 「献灯使」では、「汚染」のため、東京の「空洞 全国的に見ても決して低くはない。 は、一・七一と 同データで沖縄 とはい

それによる人口の推移が、 うだ。だが、 歴然である 献灯使」 東京の転入率三・〇三(国内一位)と比べれば、その差は の東京と沖 東京の 「空洞」化は、 縄とは、 移動を中心としたものであることを 現 「汚染」 実が逆転さ の現状を強調し、 れて 11 るか 0) ょ

るとも読めるだろう。

辿って行かざるをえないという状況において、

献灯使」

は現

くると考えられるのである。

長生きを予感させる身体の状態にはない。確実に人口減少を

意味する。

「死を奪われた」

義郎らとは異なり、

無名

世代は、

國學院雜誌

りも、 後も好転は望めないだろう日 が低下し続け、人口減少の一途を突き進むという、 るものではない。すなわち、 ですらある。 くわからず、 国は、そういった施策にどのような関与をしているのかまった 置までもが挙げられ、人口増加を目指さない管理がなされる。 性の年齢が細かに設定され、 ないという事態とを勘案すれば、 はるかに深刻であろう。 問題は、 ひたすら閉塞的な状況を等閑視しているかのよう 日本の少子高齢化との重なりだけに留 本の国家的な課題を、 「献灯使」 「去勢手術」という非人道的な処 物語内の沖縄では、 これは、 の物語世界は、 現実の少子高齢化よ 子どもや女 戱 おそらく今 画化して 生率

う局 も見えない。 「汚染」による世界からの孤立は、 る。そこに、 現 地的な人口 実の東京にせよ、「 そのなかでも、 彼らの身体や認識をめぐる問題が深く関わって 1増は、 人口減少の本質的な解決にはならない。 献灯 使 義郎や無名らは の 沖 状況が改善される望みすら 縄にせよ、 たくましく生きて 住 ともな

三、身体と認識

ている義郎が、いつから「死を奪われた状態」になったのかもを練る気にはなれなかった」という、物語内で一○七歳になっよって、「百八歳の誕生日をどう祝うかについて具体的に計画めて暗示的である。一切、直接的なつながりは語られていない。物語内では、義郎や無名の身体と、「汚染」の影響とは、極

一○○歳を越えて初めて「老人」と呼ばれ、以下の世代は、「中また、義郎のような「老人」世代もすべてが一様ではない。

取れるともいえるだろう。

定かではない。

言って」いるという。「若い老人であるパン屋は、「若い」とかよれば、「百歳を越えると休憩の必要はなくなるんだと本人はの動きがイタチのように速い」。しかも、そのパン屋の主人にの動きがイタチのように速い」。しかも、そのパン屋の主人にの動きがイタチのように速い」。しかも、そのパン屋の主人にない。義郎が年の老人」「若い老人」とされる。「老人」といっても、七○代年の老人」「若い老人」とされる。「老人」といっても、七○代年の老人」「若い老人」とされる。「老人」といっても、七○代年の老人」「若い老人」となる

全な身体をもつ「老人」は、

現実と同じく憧れの対象である。

代の授かった宝物なのかもしれない。

無名は自分を可哀想だと

る義郎の顔を羨ましそうに眺め」ている。一○○歳を超え、

「中年の」という形容帽子を被らない正真正銘の

「老人」であ

健

「六十代の若者が定年退職する時代があったのが不思議です」
「六十代の若者が定年退職する時代があったのが不思議です」
たパン屋の主人が話しているように、「献灯使」において、とパン屋の主人が話しているような「老人」は、労働面と消るのだろう。ともあれ、彼らのような「老人」は、労働面と消るのだろう。ともあれ、彼らのような「老人」は、労働面と消るのだろう。ともあれ、彼らのような「老人」は、労働面と消るのだろう。ともあれ、彼らのような「死を奪われた」状態にあるのだろう。ともあれ、彼らのような「死を奪われた」状態にあるのだろう。ともあれ、彼らのような「死を奪われた」

物が食道を上昇してくれば吐くだけだった」「それが無名の世物が食道を上昇してくれば吐くだけだった」「それが無名の世う言葉の意味が理解できないようで、咳が出れば咳をし、食べい」など、食事にすらも困難がともなう。さらには、座ることい」など、食事にすらも困難がともなう。さらには、座ることい」など、食事にすらも困難がともなう。さらには、座ることい」など、食事にすらも困難がともなう。さらには、座ることい」など、食事にすらも困難がともなう。さらには、座ることい」である。

思う気持ちを知らない」ともされている。

無名と自らとの差異

説ではなくて、視点の転換があります。無名と義郎

は助け

の姿

しかし、これらは、

難のともなう「可哀想」な「子供」として無名を捉えてもいる

なく、義郎の妻の鞠華と、 も「視点の転換」 の認識や価値観の相違は、多様な解釈を呼び込む。 和田のいう「視点の転換」によって鮮明になる、義郎と無名と り、「そこに希望があるかもしれませんね」と述べている。 伸び発展させていく感じ」に「むしろ共感できるところ」もあ しているわけではない」とし、無名の「自分なりの見方を伸 しっかりつながってはいるけれども、二人のものの見方が一致 は起こり、やはり両者の認識の相違は明らか 無名の小学校の教員である夜那谷に 彼らだけで

が感じている無名の世代の知恵は、 いく存在であろう。そのような無名に、義郎は「不思議な知恵 在な感性を表していく無名は、すべての「失格」を乗り越えて つも挙げ、無名を「完璧な適任者」と考えていた。 格』など、それにふさわしい条件を「失格」という文脈でいく 回転が速くても、それを自分のためだけに使おうとする子は 民間プロジェクト」である〈献灯使〉に関わる鞠華は、「頭 「新種の知恵」を見ている。これに関して岩川ありさは、 優秀な子供を選び出して使者として海外に送り出 かつての世代の人々が忌避 物語内で自 失

続け」ている。 このように、 面 的 な解釈に終始するのではなく、 「献灯使」の構造上

義郎と無

0

していた遅さや弱さが、人間生活の喜びだと感じる力だ」とし、

働ける頑丈で神経の太い別の哺乳類なのだ、と自己暗示をかけ

特徴であろう。 名と双方の立場から語られている点は、

多和田葉子は、「一人の視点から書いている小

國學院雜誌

ていく。義郎のほうは、「自分たち老人と今時の子供たちとは

決して病気にならず、何も考えないで朝から晩まで

僕らの身体とあまりにも違いすぎる」とまで、無名に思わせ

んは動物図鑑の同じページに載せてもらえないかもしれない 在していよう。食生活や運動能力の差異は、「僕と曾おじいちゃ

第120巻第7号(2019年)

と語られている。義郎が無名のことを「可哀想」と考える理由

無名には理解できない。そこには、やはり身体の差異が介

となる。

す 極 秘

0

すぐ泣きそうになる。なぜか僕のことを可哀想だと思っている.

張っていて強そうに見えるけれど、実はすごく傷つきやすくて、

無名から見た義郎は、「曾おじいちゃんは眉毛が濃くて顎が

あくまでも義郎から見た無名の姿である。

知恵」こそ、それに値しよう。

りない」という、鞠華が挙げた〈献灯使〉のための「資質こそ、 同時に現象していることを使者の条件にしていることには変わ また、「矛盾したり、異なった事柄だと通常では思われる資質が、 一不思議な知恵」なのだ」と指摘した。

無名の能力は、「老人」らの価値観に到底収まるものではない。 が「失格」という否定の論理でなければ示せない、そういった

義郎が「不思議」「新種」と捉えねばならない、

そして鞠華

多和田の発言とともに、 うな「希望」を見出そうとすれば、 、献灯使〉に選ばれ、海外に送られる無名に、多和田のいうよ 岩川の論及は示唆的である。最終的に 彼の資質である「不思議な

別種の生物と位置付けるかのような解釈において、義郎と無名 義郎や鞠華ら「老人」の認識も見逃しがたいのである。 ただし、「視点の転換」が繰り返される小説であるがゆえに、 互いを

異なるといわざるをえない。ただし、義郎は、無名をまったく 暗示をかけ続け」なければならない義郎と、無名とではやはり とは一致していた。しかし、そこにいたるプロセスは、「自己

> と思って義郎は何度も拳骨を握りなおした」のである。 なく、百歳の境界線を越えた時点から歩き始めた新人類なのだ ばいけない」と考え方をあらため、「実は自分は「老人」では も正しいと信じていたことをも疑えるような勇気を持たなけれ そのためにはしなやかな頭と身体が必要だ。これまで百年以上 し、「今できることは、曾孫といっしょに生きることだけだった。 てやろうなどというのは自分の傲慢にすぎなかった」と思い 直

る飛藻のことを振り返った義郎は、「子孫に財産や知恵を与え

であったとしても、「今」の義郎にとっては、 やかな頭と身体」が求められる。きっかけは飛藻や社会の変化 新しい時代と価値観とに応じた認識の変化のために、「しな いわば無名を理

解し、ともに生活するために必要なものが、「しなやかな頭と

だ」と、自身を定位し直そうとしている。それは、「何度も拳 骨を握りなお」さなければならないほどに、困難なことでもあ はなく、百歳の境界線を越えた時点から歩き始めた新人類なの 身体」なのだ。その身体と認識とに絡めて義郎は、「「老人」で

るのだろう。「自己暗示をかけ続ける」過程と同じである。

の摩擦が、 介して繰り返し推し量っている。ここには、身体とその認識と 義郎は、自らと無名との違いを、悩み苦しみながら、 鮮明に描き出されているといえるだろう。一○○年 身体

-29無名との相違を好意的に解釈しようとしていた。また、

理解できていない、

「宝物」という言葉が用いられていたように、義郎は、

孫であ 自らと あるいは理解しようとしないのではない。

-30ともなうのだ。 以上をかけて培われた価値観でさえも転換せざるをえないとい 義郎は簡単にはできない。そこには、苦悩や困

鞠華も、義郎と変わらないだろう。

無名を

〈献灯使〉

の

完

|難が

八年の歳月が経ち一五歳になった無名は、

夜那谷に推薦

を戦い抜いてほしい」と願い、「自分さえ黙っていれば、 壁な適任者」と確信するも、彼女は、「無名に危険な使命は負 わせたくない。このままいつまでも義郎に守られて平穏な毎日 無名

実際に、無名を〈献灯使〉に勧誘したのは夜那谷だった。 は審査委員会に発見されずにすむだろう」とまで思っている。 曾祖母としての感情を捨て切れない鞠華との差異は甚だしい。 〈献灯使〉にふさわしい存在として見詰め続けた夜那谷と、 無名

國學院雜誌 第120巻第7号(2019年) 否定はできまい。 日本や世界の未来よりも、 柔軟性に富む思考と価値観とを見せ続ける無名は、「アメリ 曾孫の安全と成長とを願う曾祖母を

ながりを暗示するこの場面は、 化によって外交の閉ざされた日本にあって、 リアを感じる」と、 あろう「大きな世界地図」と自身との重なりを感得する。「鎖国 大陸が右半身、 ユーラシア大陸が左半身だ。 日本を中心に描かれた、メルカトル図法で 日本から海外に送られる 世界と自己とのつ 腹にオーストラ 〈献灯

使〉にふさわしいイメージの構築でもあろう。そのあと意識を

関係性をより強固にするような提案をしているのである。これ

うちに女性化したと思しい兆候を示す。 とはなく、 ている。すべて、あまりにも大きな身体上の変化だ。 で外出し、「声帯ではなく、 が進み、 るようになった」と物語世界のなかで、 された〈献灯使〉を承諾する。「生まれた時の性が持続するこ 呼吸器には「頼りなさを感じる」ようになり、 誰でも人生のうち必ず一度か二度は性の転換が起こ 腕時計から声が出」るようになっ ほかにも無名は、 無名も、一五歳になる 車椅子 近眼

だった」と語られているのである。義郎が、「なぜ休みなく働 年以上、元気でいられるよ」と、義郎を思いやりつつ、互い 髪の毛で元気に暮らしてきたんだから、 悲観しない。「曾おじいちゃんだってもう五十年以上も銀色 もち掛ける。無名は、苦痛も、自らの身体上の変化もまったく に光り始めた」無名は、「二人で銀色同盟を結ぼう」と義郎に な「老人」である。「髪の毛が色を失い、みるみるうちに銀色 た」。無名からすれば、「涙がとまらない」義郎は、「可哀想」 くのかと言えば、何もしないでいると涙がとまらないからだっ はまだまだ丈夫」であり、「相変わらず可哀想なのは老人たち このような無名の立場から、「百十五歳になった義郎 僕だってこれから五 の身体

義郎の願望である。

作り上げられていく一方で、〈老い〉にともない、

身体をめぐ

の「希望」という灯に献ぜられる使いである。

笑みが浮かんだ」のだから、 予感させるものだろう。 により、 「義郎の涙は奇跡のようにとまって、 無名の性質は、やはり「希望」 目元に銀色の微 を

受け入れられるものだったのだろうか。「僕だってこれ 五十年以上、元気でいられるよ」という言葉が、義郎の涙を「奇 だが、義郎にとって、〈献灯使〉になるという無名の選択 は

跡のように」止めたのだ。無名が、元気に長く生きることこそ、

〈献灯使〉にふさわしい無名のイメージが

自らが培った価値観のすべてを捨て切れない義郎がいる。 る認識を変えざるをえないことを理解しながらも、 点の転換」の繰り返しから生じる、他者間の認識の差異によっ 献灯使」は、 一義的な結論への帰着を回避し、多様性に 最後まで、 視

む解釈を呼び込む物語になっている。「希望」としての無名も、

夜那谷とでは意味が異なっていよう。

や鞠華と、

という試み

四 〈献灯使〉

A れば、 砂浜の感触、 一五歳になった無名は、 海水の臭いなど、 最後まで身体的な感覚を 横たわった際にかかる重

> 年以上、元気でいられるよ」という無名の言葉は、まったく異 るのは「真っ暗な海峡の深み」なのだから、灯もない。「五 決して否定されているわけではない。「闇に脳味噌をごっそり 味わおうとしていた。 人身御供に等しいのではないか。その意味で、〈献灯使〉は、人々 違いないだろうが、義郎や鞠華の認識からすれば、 なる価値へと転換された。無名は、「希望」をつなぐ存在には つかまれ、無名は真っ暗な海峡の深みに落ちていった」という 「献灯使」の結末は、実体的な身体の喪失を表していよう。あ 旧来的な身体感覚は、 無名においても、 彼の処遇は

あって、どうしても手放しがたいものの価値を、「希望」とし や環境、身体や認識の変化への対応を余儀なくされるなかに 望」の解釈も変わるだろう。つまり、 無名を思い続け、残された義郎の心の内を想像するとき、「希 「献灯使」からは、

しみと悲しみをとおして、それが描かれている。

献

身体」によって生き続けなければならないという〈老い〉の苦 て読み取ることもできるのである。「死を奪われた」「死ねない

問題も関わっていると考えられる。たとえば、 から生み出された「岩手まで」や「御婦裸淫の日」のような言 灯使」の結末、 義郎や無名らの身体と認識 外来語の未使用 には、

— 32

語遊戯的な言説は、

小説の語りのみならず、

義郎や無名らの発

語が使用されなくなっただけでなく、「古くさいというスタン

話にも見られる。「乳歯」を「入試」へと意味の変換をしたり、 「「トイレ」の「イレ」に、「入れ」を聞き取り、

登場人物と言葉との関連性は高い。 に入れるという言葉の矛盾を感じ」たりする無名の思考など、 出す場所なの

第120巻第7号(2019年) くさん脳の引き出しにしまっていて、捨てようとしない」人物 でもある。そもそも「鎖国」政策に批判的であり、 べてを転換し切れない義郎は、たびたび外来語を口にしていた。 価値観のす

われない言葉も全部頭の中に入っている」「使わない言葉をた

無名にとって義郎は、「曾おじいちゃんは、

死んだ言葉、

使

國學院雜誌 ている」という。 拾い、言葉を刈り取り、言葉を食べて、肥ってくれることを願っ 言語遊戯的な感性にも長けた無名は、 まさに

また、教員である夜那谷は、「子供たちが言葉を耕し、

言葉を

象徴でもあろう。 ず、子どもの成長を促し、 言葉を摂取して成長する子どものあるべき姿であり、 いを体現する存在でもある。 「言語を輸出して経済を潤し」てもいる。 国の経済をも潤す言葉は、 物語内では、 南アフリカとイン 義郎が捨て切れ 豊かさの 夜那谷の

> 差ない。いずれにせよ、「言葉の寿命はどんどん短くなっていく」 ていくようだ。そういった言葉の寿命が短いのは、 が尽きるのだろう。意味の剥奪された音だけの響きが消費され しゃああああああ」という「最近の流行語」も、 も「もう死んでる」とされるなかで、子どもたちが叫ぶ「かん ある」ともいう。「迷惑は死語」であり、「アリガトウって言葉_ プを押されて次々消えていく言葉の中には後継者がない言葉も 瞬く間に寿 現実でも大

となり残される側の物語も、そこには内在していた。「死を奪 せるわけではない。だが同時に、〈老い〉 てなお 「死ねない身体」 さは、豊かさに反する社会の乏しさにほかなるまい。 だからといって、無名に抱かれる「希望」のイメー ジが色褪

と最初に語られ、無名らの世代(子ども)の寿命も長くはない

(短い)だろうと推測される。言葉と子どもとに係る寿命の短

と悲哀とを噛み締めつつ生きていくのだろう。 も捨て切れず、乏しいといわざるをえない社会のなかで、 われた」と表現される義郎や鞠華ら「老人」は、 彼らの身体と認 言葉も価

識とをめぐる価値観もまた、無名のそれと同様に見直されるべ

きである。

義郎が過去に執筆した、 歴史小説 「遣唐使」 は、 外 国 0 地

どん短くなっていく」と語られている。「鎖国」によって外来

小説の冒頭付近では、「言葉の寿命はどん

にもかかわらず、

択したように、義郎は前者のようなあり方を選んだのである。

義郎からすれば、〈献灯使〉という試みを、希望や期待をもっ

るだろう。 義郎と〈献灯使〉 う点において、一般的な遣唐使と〈献灯使〉とは、意味を同じことができる」という「モノノ墓地」に埋められた。特使といらいので」、「敬意を持って別れたいものを誰もが自由に埋めるを多用したために公表にはいたらなかったが、「燃やすのがつ

〈献灯使〉というふたつの言葉が反響し合う。無名が後者を選を結末まで読み進めたとき、対極的ともいうべき「遣唐使」とであり、〈献灯使〉は、未来に託され変わるものである。物語

くする。しかし、歴史小説「遣唐使」は、埋葬されて残るもの

の変化にともなう痛みは、あまりに大きい。少子高齢化によるいを、読者に喚起する物語にもなっている。身体をめぐる認識義郎が抱くような〈老い〉の悲哀といかに向き合うかという問

 $\widehat{4}$

て受け入れることは難しいだろう。多和田葉子「献灯使」は、

人口減少を突き進む、現代の日本社会にあって、「死を奪われた_

になる無名、

両者の姿は痛烈な批評となりう

次のような紹介がなされている。著『献灯使』(講談社) を読む」(「図書新聞」平成二七・一・一〇) では、木とえば、小野正嗣の書評「言葉への感受性を取り戻せ―多和田葉子

注

込んだ不安と毒の種子を、時間を早回しするように発芽させてみせらしいのは、作家の想像力が、震災以降の日本の「いま」に混じりディストピア小説の傑作として絶賛された表題作「献灯使」が素晴

同時に、小野は、「「献灯使」のディストピアは、すでに我々の「現的な関係の問題として描いているからでもある。

たからだけではない。不気味な未来図を言葉と人間とのいわば身体

実」である」とも述べており、極めて「現実」的な、喫緊の問題と

シンタロ目巻ユーコバー、ニーテアノベル寸旋「ラバーして、この小説を読んでいる。

(2)各に代「公益~)から」(『新像』平成二七・二) でで、希望』は戻る―旅(2)多和田葉子・ロバート「キャンベル対談「やがて、希望』は戻る―旅(2)

天野正子『老いの近代』(岩波書店、平成一一・二)

そかれている。 『ジェロントロジー―加齢の価値と社会の力学―』(株式会社きんざ(5)ロバート・C・アッチェリー/アマンダ・S・バルシュ/宮内康二訳

また、「文学」等の芸術領域の利用に関して、以下のような分析が挙や実践からの照査を統合する必要がある。エイジングのメカニズムを理解し、対策を検討するためにはある。エイジングのメカニズムを理解し、対策を検討するためには持つこと」である。その根拠とは「現実に限りなく近い正しさ」で持つこと」である。その根拠とは「現実に限りなく近い正しさ」で

7

多和田葉子「「献灯使」をめぐって」(「本」平成二六・一一)では、平

である。 である。 である。 いずれも、作者本人に限らず鑑賞する我々(Winkler1992)、晩年に詠われた詩のなかには人生の本質を表現するものが多く見られる。いずれも、作者本人に限らず鑑賞する我々るものが多く見られる。いずれも、作者本人に限らず鑑賞する我々に対し年齢を重ねることの意味や生きることの意義を示唆する作品である。

(6) 曾秋桂「エコクリティシズムから見た多和田葉子の書くことの「倫理」「不死の島」と「献灯使」との連続性・断絶性―」(「比較文学研究」平成二九・一二)

成二五年に被災地を巡ったあと、「短編「不死の島」を展開させて長城二五年に被災地を巡ったわたしは、この旅をきっかけに立ち位置が少し変わり、その結果、『献灯使』という自分でも意外な作品ができかがった」と述べられている。なお、「「献灯使」をめぐって」は「現代ビジネス」(平成二六・一・一五 https://gendai.ismedia.jp/代ビジネス」(平成二六・一・一五 https://gendai.ismedia.jp/articles/-/40935)の記事にも掲載されている。

(8) 法務省統計局「社会生活統計指標」(「統計でみる都道府県のすがた 2018」法務省統計局ホームページ、http://www.stat.go.jp/data/ k-sugata/index.html 平成三〇二公開)

國學院雜誌

9

(10)岩川ありさ「変わり身せよ、無名のもの―多和田葉子「献灯使」論」(「すばる」平成三○・四)

二六・八)に拠る。